

りて疑ふべき餘地が無いとすれば、魏書や北史に瓜州刺史元太榮の東陽王に封ぜられたのを永安二年に繋けて居るのは誤でなほ以前に置くべきであると見るか、或は元太榮以前に別に同じ瓜州の地に於て東陽王に封ぜられた人があつて、それが永安二年の前二年なる孝昌三年には尙其の地に在つたのであるが、魏書にはそれを載せてゐないのだと見るか、それとも孝昌三年の東陽王といふのは私に稱した所であつて(後述 参看)、永安二年になつて公けに封爵の事があつたと見るべきか、何れとも今積極的にそれを證する方法は無い。兎も角北魏の末に當る孝昌・永安・普泰・中興の頃に瓜州に東陽王と稱する人が駐まつて居り、永安二年東陽王に封ぜられた人は瓜州の刺史であつたことも明らかであり、而して孝昌三年には王の從臣、普泰||中興二年には王自からに依りて造經の功德が修せられたものである。

さて此の事實を知つて前に見た大周李君修功德記について考へて見るに、記には前述の如く千佛洞莫高窟の濫觴を沙門樂傳、法良禪師等に歸し、次に「復有刺史建平公東陽王缺七後合州黎庶、造作相仍、實神秀之幽巖、靈奇之淨域也」として、續いて其の有様を述べ、更に「樂傳・法良發其宗、建平東陽弘其迹」と繰り返して居る。こゝに寢史といふのは此の碑の所在地から考へても勿論瓜州の刺史なること疑無い。建平公東陽王とか、建平東陽とか二つの爵名を連書したのは、其の指す所一人ではなく、兩人なるが爲であるとも思はれるが、或はまた初め建平公であつて後に東陽王となつた一人を態とかく記したものと考へ得られぬでもない。後日瓜州の刺史で建平公の爵に封ぜられた人を捜し出すことでも出来れば直ちに解決されるべき問題である。かく瓜州刺史建平公東陽王が千佛洞の跡を弘め、神秀靈奇の地ならしめたとの記事に遭遇しては、吾人は今や直ちに前記魏末の人、瓜州刺史東陽王元太